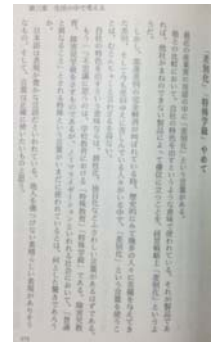


## 「差別化」「特殊学級」やめて

25 日レポートした阪牧吉次『塵芥抄』のページをめくる。581 ページの肉厚の本だ。長男・博和さんによるカバーイラストが、本に温かみをあたえている。「亡き友」の紡いだ「言の葉」たちが、蘇えってくる。

第 3 章「生活の中で考える」冒頭、表題の「言の葉」が目についた。これは 1994 年 6 月 6 日信濃毎日新聞「建設標」に掲載されたものだ。読みやすい文章であり、新聞掲載らしくコンパクトにまとめられている。



最近の産業界の用語の中に「差別化」という言葉がある。

他との比較において、自社の特色を出すというような意味で使われている。それが製品であれば、他社がまねのできない製品によって優位に立つことを、経営戦略上「差別化」というようだ。

しかし、部落差別の完全解消が叫ばれている時、歴史的にみて幾多の人々に苦痛を与えてきた差別、そして今も差別ゆえに苦しんでいる人々がいる中で、「差別化」という言葉を使うことは、むとんちやくと言わざるを得ない。

自社の特色を出すという意味ならば、個性化、独自化などふさわしい言葉があるはずである。

もう一つ不思議に思うのは、学校教育における「特殊教育」「特殊学級」である。障害児教育、障害児学級をさすものであるが、ノーマライゼーションといわれる社会において、「普通と異なること」とされる特殊という言葉がいまだに使われているとは、何とした驚きであろうか。日本語は表現が豊かな言語だといわれている。他人を傷つけない素晴らしい表現がありそうなもの。そして、言葉は正確に使いたいものと思う。

長年にわたり「差別」や「部落問題」に関心を持ち続けてきた阪牧らしく、鋭く問題を投げかけている。最初の「差別化」という言葉は、名古屋市観光戦略ビジョンを策定する会議で使ったことがある。企業の経営戦略にならい、自治体の政策においてもキーワードの一つになっていた。

「特殊教育」「特殊学級」については、とりわけ退職後に関心をもったテーマにかかわる。正直、この本を再読するまでは「特殊」という言葉をあまり意識せずに使っていた。「特殊学級」と対比させて、「普通学級」に通うなどとレポートにも書いていた。「普通」と「特殊」はどう違うのか。ノーマライゼーションやインクルージョン、障害者の人権や差別解消法などと関連づけて考えていきたい。

それにしても阪牧から学ぶことが多く、彼の「死」が残念でならない。

(2016 年 11 月 30 日)